

ロンウォー語正書法

澤田 英夫

民族名・言語名 Lhaovo (ジンポー語による呼称 Maruの方がよく知られる。)

分布 雲南省徳宏傣族景頗族自治州、ビルマのシャン州北部のナムカム・ムーツェ・クツカイ・センウィ・クンロン・ラシオ、それにカチン州ンマイカ川東岸のソーロー・チーブエー、マリカ川西岸のスンプラブン、州都ミッチナーとその対岸ワインモーなどの郡に居住する。(澤田 1998:51-52)

人口 ミャンマー 103,600(1983 統計)、中国 10,000 世帯(1999) (*Ethnologue*, 14th edition)

言語系統 シナ=チベット語族、チベット=ビルマ語派、ロロ=ビルマ語支、ビルマ語群。

正書法 ロンウォー族のカトリック聖職者 Luka Lahung: Hhao" Leim"(1936-)によって作られ、1968年制定。ただし、普及率はさほど高くない。

頭子音

		LABIAL	DENTAL	ALVEOLAR	PALATAL	VELAR	GLOTTAL
NASAL		m-mh /m/*1		n-nh /n/	ny-nyh /ñ/	ng-ngh /ŋ/	
STOP/	<i>unasp.</i>	b-p /p/	z-zh /ts/	d-t /t/	j-jh /c/	g-k /k/	
AFFRICATE	<i>aspirated</i>	ph /ph/*2	x /tsh/	th /th/	c /ch/	kh /kh/	
FRICATIVE	<i>voiceless</i>	f /f/	s /s/		sh /š/	h-hh /x/	
	<i>voiced</i>	v-vh /v/				q-qh /ç/*3	w /f/
LATERAL				l-lh /l/			
FLAP				r-rh /r/			
APPROXIMANT					y-yh /y/		

**音素表記は Sawada(1999) に従う。以下の項同じ。

*1 ダッシュの前の字は後続する母音が非緊喉の場合、後の字は後続する母音が緊喉の場合に用いられる。以下同様。

*2 表記が 1 通りしかない頭子音は、非緊喉母音としか結びつかない。以下同様。

*3 方言によっては非緊喉母音の前で /x/と/ç/の対立が中和し、どちらも hh で表記される。

介子音

-y- /-y-/ 頭子音/m-, p-, ph-, k-, kh-/とのみ共起。

*緊喉母音の前の/my/を myh で表すところを見ると、/my/も/ñ/と同様単子音扱いなのかもしれない。cf. phy /phy/, khy /khy/

母音 + 末子音

/-#/	i /i/					u /u/
	e /e/	a /a/	oe /ø/	au /au/	o /o/	
/-y/	ei /ey/	ai /ay/		ai /ay/		ui /uy/
/-ŋ/	ae /eŋ/	ang /aŋ/		aung /auŋ/	ao /oŋ/	ung /uŋ/
/-k/		ag /ak/		aug /auk/		ug /uk/
/-ʔ/	e,-e;-e' /eʔ/	a,-a;-a' /aʔ/*1	oe,-oe;-oe' /øʔ/		o,-o;-o' /oʔ/	
/-n/	in /in/	an /an/				un /un/
/-t/	id /it/	ad /at/				ud /ut/
/-m/		am /am/	eim-um /øm/*2			
/-p/		ab /ap/				

*1 声門閉鎖音の表記と声調表記は融合する。以降同様。声調の項参照。

*2 一部のロンウォー人の耳には母音が/u/に近く聞こえるのか、um と表記される例が見られるが、俗用である。

母音の緊喉性素性

[±creaky]/ 頭子音表記によって区別。頭子音の項参照。

声調

-(無印)	-,*1	/F/
-:	-!(-;)*1	/L/
-"	-'*1	/H/

*1 末子音/-ʔ/の表記との融合形。ただし、/-k,-t,-p/を持つ音節にも現れることがある。

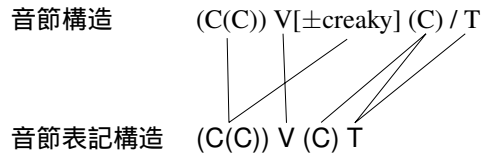
**ロンウォー語は文法的に条件づけられた声調交替の現象を持つが、表記は現実に発音される通りに行い、単一の声調表記を環境に応じて発音し分けるといふことはしない。

mazo: 「食べない」; zo: nae'' 「食べるだろう」; zo'' ra'' 「食べた」

弱化音節

弱化音節は後続する音節に接して綴られる。一方、閉鎖音で終わらないV/Fの音節は、後続する音節との間にスペースを置いて綴られる。

評価



- 弱化音節の表記を除いて、異なる音節が同一の表記を与えられることはない。
- /-k,-t,-p/を持つ音節の場合にのみ、単一の音節が一通り以上の表記を与えられる可能性がある。
- 声調表記は義務的であると言ってよい。
- 声調表記に句読点や符号を用いているため、相互の区別がつきにくい点が実用上の難点か。

参考文献

- 澤田英夫：「チベット・ビルマ諸語」新谷忠彦編『黄金の四角地帯—シャン文化圏の歴史・言語・民族』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 歴史・民族叢書 II），慶友社，pp.47-61, 1998.
- SAWADA, Hideo: “Outline of Phonology of Lhaovo(Maru) of Kachin State”, Linguistic & Anthropological Study on the Shan Culture Area, report of research project, Grant-in-Aid for International Scientific Research (Field Research), pp.97-147, 1999.
- 藪司郎：「マル語」. 亀井・河野・千野（編）『言語学大辞典 第4巻』、三省堂、1992、pp.168-172.